編纂所だより

大阪市史編纂所（発行）
〒550-0014 大阪市西区北堀江 4-3-2

第 52 号

大阪市史料調査会（編集）
大阪市立中央図書館内　TEL06-6539-3333

●大阪市史編纂所 40 年、大阪市史料調査会 40 年

今年 2019 年は大阪市史編纂所が発足してから 40 年になります。正式には、1979 年 7 月 1 日に、大阪市史編集室が改組されて大阪市史編纂所となりました。今回は、40 年の編纂所の歴史を紹介します。

大阪市史編纂所の前身をさかのぼりますと、1901 年（明治 34）に発足した『大阪市史』編纂事業の時に編纂事務係が置かれたことに始まります。20 世紀の一番最初の年です。「市史」と銘を打って、自治体の歴史の編纂を始めたのは、この『大阪市史』が日本最初です。この『大阪市史』は 1915 年に全 8 巻が完成しています。その後、『明治大正大阪市史』『昭和大阪市史』『昭和大阪市史続編』と断続的に、大阪市は修史事業を行いました。ところが、それぞれの扱った時代が異なったために、大きな問題が生じていました。それは、大阪市そのものの市域が 3 度の拡張を行ったため、同じ地域で先史から現代まで一貫した通史になっていないということです。また、歴史学や考古学など、その後の学問の発達や新史料の発見などが反映されていないということも、見直しを行う大きな要素となりました。

1979 年に発足した大阪市史編纂所は『新修大阪市史』編纂事業および史料の収集保存を行う組織としてスタートしました。スタッフとしては、所長・主幹・主査の 3 人が専従で、後は教員の応援や非常勤職員で構成されていました。史料調査とその採訪・受け入れ・整理・保存など、歴史学の専門知識を持つスタッフが必要だったので、新たにそのための組織を作ることになりました。それが大阪市史料調査会です。最初は 2 名の若手研究者が調査員となり、活動を始めましたが、その後何名かの調査員が加わり、目覚ましい成果を上げるようになりました。しかしながら、調査員は専従ではなかったので、大学の教員に転出する人たちも出てきました。40 年の歴史の中で、大学の教員に転出した人は 10 数人に上っています。

さて、編纂所が発足した当初は、大阪市立中央図書館の旧館 2 階に執務室がありましたが、中央図書館の南側に 2 階建ての別棟が建てられ、その 2 階が編纂所施設となりました（1 階は子どもの図書館）。それまでなかった専用の会議室や貴重書庫などもありました。ところが、大阪市に公文書館を建設することとなり、その場所となったのが編纂所の入っている別棟の南側でした。そして、公文書館が出来ると、その 2 階部分に編纂所が移転することとなりました。ちょうど昭和から平成に時代が変わる頃です。

1996 年に新中央図書館が完成し、編纂所はその 3 階に移転し、現在に至っています。このように編纂所は何回か移転しましたが、近くを移動しただけであったと言えます。

40 年の間、市民の皆様から多数の史料のご提供をいただき、それは『新修大阪市史』本文編および現在刊行中の史料編に活用させていただいています。市域だけでなく、市域外史料についても、大阪市域に関係する史料の収集を広範に行ってきていますが、それらの史料は写真で複写を作成し

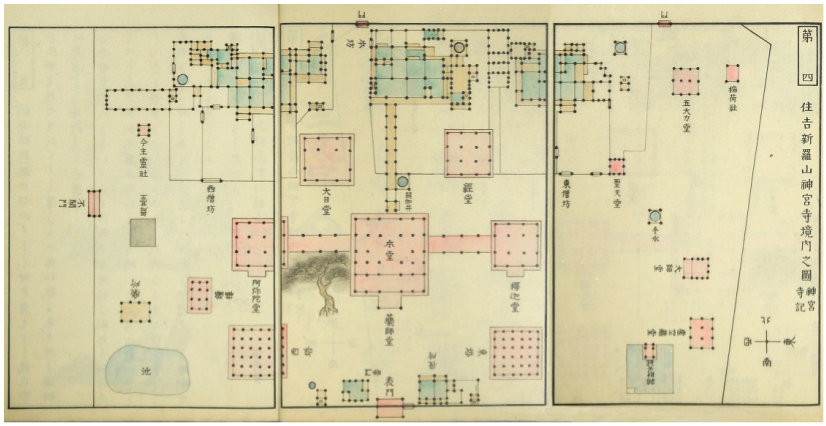
たり、コピーをしたり、あるいはマイクロフィルムに収めており、いずれも膨大な量になっています。

この間、寄贈していただいた史料の中には、大阪市の指定文化財に認定されたものもあります。編纂所・史料調査会は40年の歴史ですが、それ以前からの歴史と伝統をも引き継いでいます。数量は少ないのですが、『大阪市史』『明治大正大阪市史』時代に収集したものも、引き継いで保存しています。日本の自治体史でも、このような古い歴史と伝統のあるのは、極めて稀であるということができます。

何もしなければ、先人達の残した史料は次第に失われて行くしかありません。編纂所・史料調査会は出来るだけそういった史料を収集し、記録に留め次世代に伝えて行きたいと願っています。これからもご理解・ご支援をお願い致します。（堀田暁生）

●忘れられた寺院―住吉大社の神宮寺―

江戸時代の住吉社（現在の住吉大社）の境内には、神宮寺（じんぐうじ）と呼ばれるお寺がありました。神社の中にお寺があるという光景は、不思議に感じられるかもしれません。ですが、江戸時代以前の日本には、神仏習合（しんぶつしゅうごう）という考え方があり、日本固有の神と仏教の仏菩薩（ぶつぼさつ）とが同一視されたり、神社とお寺が同じ空間に建てられたりと、現在のように神道と仏教に対する信仰がはっきりと分かれていないのが一般的でした。今でも鳥居が立っているお寺を目にすることがあると思いますが、そうしたものが神仏習合の名残なのです。



摂津鈔附図第四之上　大阪市立中央図書館所蔵

神仏習合の特徴を最もよく示すものが神宮寺です。神宮寺とは神社に付属して置かれた寺院のことで、神社の境内または隣接地に建立されました。そこには社僧（しゃそう）というお坊さんが所属しており、彼らは神様の前でお経を唱える神前読経（しんぜんどきょう）などの祭祀（さいし）を行い、神様を仏教の力で護る役割を果たしていました。神宮寺は、慶応4年（1868）3月に明治政府が神仏判然令（しんぶつはんぜんれい）（神仏分離令）という、神仏習合の考え方を禁止し、神と仏、神社と寺院を明確に区別する法令を発して以降、そのほとんどが廃絶しましたが、わずかながら現在の日本列島各地に残っています。

かつて住吉社にあった神宮寺は、天平宝字2年（758）に孝謙（こうけん）天皇の命令によって建てられたと伝えられています。住吉社には神宮寺のほかにも荘厳浄土寺（しょうごんじょうどじ）・津守寺（つもりでら）（現在では廃寺）といった寺院が付属しており、それらは住吉社の神主を代々勤める津守一族の中で、社僧となった神主の子供や兄弟によって管理されていました。12世紀の終わり頃から鎌倉時代にかけて、社僧となった人物の子孫が、神宮寺などの管理を世襲（せしゅう）するようになり、住吉社の中でまとまっていた津守一族の枠組みから外れて、独立した動きをみせるようになります。

その結果、文永11年（1274）・弘安4年（1281）に起こったモンゴル襲来の頃に、神主を代々勤める一族と、神宮寺などの管理を世襲する一族との間で対立が起こり、後者は住吉社から追放されてしまいます。その後、神宮寺などの寺院は、神主の子弟によって管理される体勢へと戻り、明治維新まで存続します。しかし、先ほど述べた神仏判然令が出されると、神宮寺は取り壊されるこ

とになり、跡形もなくなってしまいました。

そんな住吉社の神宮寺は、現在の住吉大社境内の、第一本宮の北側にありました。江戸時代に描かれた絵図によると、本堂・釈迦堂（しゃかどう）・阿弥陀堂（あみだどう）などや僧房に加えて五間四方（ごけんしほう）の東西二基の塔があり、いかに大きな寺院であったかがうかがわれます。

このうち西塔だけは、神宮寺廃寺の際に、徳島県の切幡寺（きりはたじ）（阿波市）の住職が買得し、明治 6 年から 15 年（1873 ～ 82）にかけて大阪から同寺へと移築され、現在同寺の大塔として残されています。塔自体は、室町時代から戦国時代にかけて、住吉社境内が焼かれたため、慶長 12 年（1607）に豊臣秀頼（とよとみひでより）によって再建されたものですが、24.168 メートルの高さを誇る立派なものです。江戸時代の神宮寺東塔・西塔は、神宮寺を含む住吉社のシンボルタワーとして、参詣者や周辺に住む人々からいつも仰ぎ見られていたことでしょう。（生駒孝臣）

◆ 新刊のご案内

『大阪の歴史』第 88 号

松本　望「天保期大坂における漢詩集の出版をめぐる諸動向―広瀬淡窓『遠思楼詩鈔』初編の検討より―」

吉川真理子「井伊直弼像の変遷―大正期以降の小説と道頓堀上演を中心に―」

草村　克彦「【大阪歴史散歩・番外編】「明治維新の魁」、天誅組の痕跡を市内に辿る」

内海　寧子「【史料紹介】大坂からの伊勢参宮―鴻池家の代参宮記録『御代参宮道中記』―」

本体 700 円　　送料実費

『大阪市史史料　第 86 輯　明治大正大阪市史編纂参考談話集』

『明治大正大阪市史』編纂時に各方面に取材した記録と、当時行われていた明治時代に関わる講演会の速記録等を収録しました。

本体 1800 円　送料実費

『大阪市史史料　第 87 輯　楠木正成関係史料（下）』

南北朝時代の武士楠木正成、正行・正儀父子は、大阪市域を含めた近畿一帯で活動しました。本書は正成・正行を扱った上巻に続き、正儀の活動の軌跡を中心にまとめた史料集です。

本体 1800 円　送料実費

刊行物のお求め方法

大阪市史編纂所の刊行物は大阪市史料調査会で窓口・通信販売を行っています。また、下記の書店でお求めいただけます。詳しくは大阪市史料調査会（市立中央図書館 3 階市史編纂所内・電話 06-6539-3333）までお問い合わせください。

取り扱い書店：ジュンク堂書店（大阪本店・難波店）
紀伊國屋書店（梅田本店　※『大阪の歴史』最新号のみ取扱い）

★大阪市史編纂所では、ホームページを開設し市域の歴史に関する情報を発信しています。
https://www.oml.city.osaka.lg.jp/?page_id=871　または「大阪市史」で検索してください。
今日、大阪でどんな出来事があったかを知る「今日は何の日」、催し物や刊行物を紹介する「おしらせ」、「みんなの質問」では、全国の図書館に寄せられた「おおさか」に関する質問と回答を掲載しています。
また、この「編纂所だより」のカラー版の閲覧とダウンロードも、上記ホームページより可能です。

絵はがきでみる昔の大阪（30）
難波ステーション（明治 41 年、1908 年 8 月 1 日）

この絵はがきは明治 41 年（1908）に、大阪市営電気鉄道（大阪市市電）の第二期線が開通したことを記念したものです。大阪市市電は明治 36 年（1903）に、大阪築港と花園橋間で開業したのが最初です。この「絵はがきでみる昔の大阪」でも、第 10 回（32 号）に第二期線の東西線に関したもの、第 11 回（33 号）では第三期線に関してのものを紹介しています。

この絵はがきには興味ある事柄が写っています。まず目をひくのはアーチです。多分、植物の緑で装飾されていたと思います。この時代には祝賀行事の時にはアーチを作ることが多かったようです。明治 37 － 38 年（1904-05）の日露戦争では、凱旋してきた兵士達を歓迎するため、アーチ状の凱旋門がいくつか作られています。又、民間でも大阪ホテルが開業したときの写真にアーチが写っていました。

次に難波の駅舎が写っていて、「すみよし」「さかい」「はまでら」「たんのわ」「わかのうら」などの文字が見えます。これらは難波駅を始発とする南海電車が営業する各方面を表しています。南海電車は、明治 18 年（1885）に難波－大和川間を開業した阪堺鉄道を元にしています。堺には明治 21 年に通じています。南海鉄道と改称したのは明治 28 年（1895）のことです。 南海鉄道が和歌山市駅まで延伸されたのは、明治 36 年のことです。天王寺・今宮で第 5 回内国勧業博覧会が開催された時期に当たります。南海鉄道は、明治 33 年に天下茶屋－天王寺間に支線を作っていましたので、内国博の時には有利に働いたと思われます。

明治 41 年の大阪市市電第二期線の開通は、大阪市の南の玄関口の一つ難波と、北の玄関口である梅田が直結されたことになり、大阪市繁栄の基礎を作ったともいえる大きな出来事だったのです。

（堀田暁生）

「編纂所だより」は３月と９月の年２回発行し、大阪市立各図書館のほか、各区役所、各区民センター、市役所市民情報プラザ、総合生涯学習センター及び各市民学習センター、大阪歴史博物館、大阪城天守閣、住まいのミュージアムなどに置いています（数に限りがあります）。大阪市立中央図書館（3 階大阪コーナー）及び各区の図書館では最新号を常備していますので、カウンターでおたずねください。　（平成 31 年３月発行）